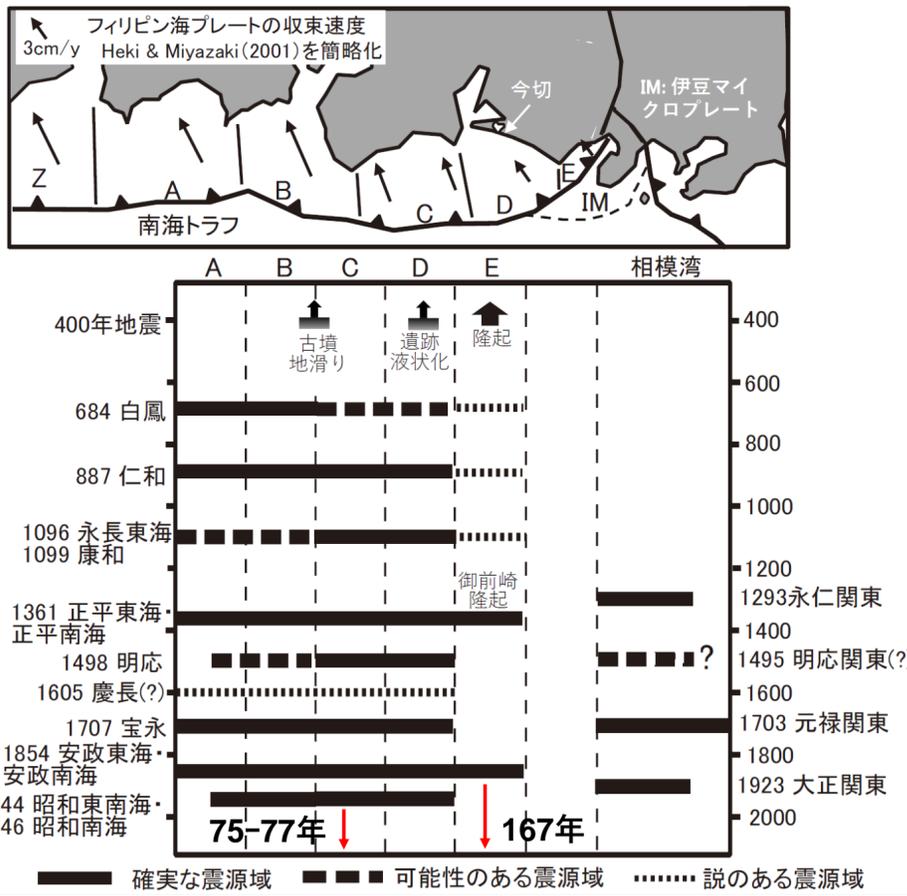


# 静岡県三保半島の「瀬織戸の渡し」に関する地質学的調査

岡崎 颯太・北村 晃寿（静岡大学）



## 背景

南海・駿河トラフでは約100～150年間隔でマグニチュード8クラスの大規模地震が繰り返し発生している。西暦1854年の安政東海地震では清水・三保付近で1 m以上もの隆起現象が発生した(駿河トラフ[左図のE領域]が破壊された)が、次の1944年昭和東南海地震および1946年の昭和南海地震ではそれらの地域で隆起は起きていない。これらの地震履歴から昭和東南海地震で破壊されなかった駿河トラフでの東海地震が切迫している恐れがあり、近い将来起きることが指摘された。

昭和東南海・南海地震から70年以上が経過した現在、次の南海トラフ巨大地震発生の切迫性も高まっているなか、**東海地震がいつ起きるかなど被害の多様性を把握するためにはさらなる調査が必要**である。

## 三保半島「瀬織戸の渡し」

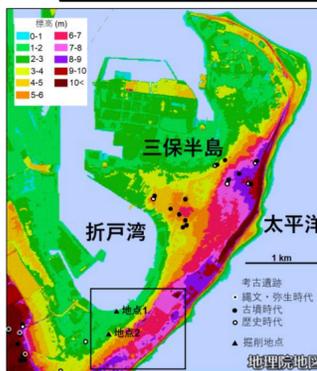
三保半島基部(現在の地名で折戸・駒越間)には古代・中世に「瀬織戸の渡し」という水路があり、折戸湾と太平洋が繋がっていたという。国指定重要文化財「絹本著色富士曼荼羅図」(室町時代後期)でも島のように描かれている。

三保半島は安倍川や有度丘陵から運搬された堆積物によって形成された分岐砂嘴で、南西から北東方向にかけ拡大していったと考えられる。そのような形成過程を踏まえると、半島基部にあった水路は、津波によって破壊・形成された可能性があり、過去の東海地震発生を示す手がかりとなりうると考えられる。

西暦1498年の明応東海地震・津波で浜名湖の南側の砂州が破壊され、外海と繋がる今切口が形成されたという例もある。



この位置に左のような説明看板がある。



## 方法

「瀬織戸の渡し跡」近隣の2地点(地点1, 2)でボーリングコアを掘削した。半裁し、堆積相の記載・断面の撮影を行った。

## 結果・考察

コア試料は全体的に砂礫質の層からなり、三保半島全域に厚く堆積した砂嘴の主構成層であると考えられる。

今回の調査では、水路の開閉を示す明瞭な堆積相の変化は見られず、<sup>14</sup>C年代測定可能な試料も産出しなかったため、「瀬織戸の渡し」の形成時期の特定には至らなかった。

年代測定可能な試料(植物片や炭酸塩殻)が保存される環境として静水域が適していることから、今後の調査は北西の折戸湾沿岸低地で行うのが良いと考えられる。

また、説明看板に記載されている和歌について、「有渡」ではなく「宇治」について詠んだ類似の歌が万葉集に採録されている。いつから渡しがあるのか、さらに調査が必要である。

## まとめ

「瀬織戸の渡し」は津波によって形成された可能性がある。過去の東海地震解明のため、近隣の2地点でボーリング調査を行ったが、残念ながら形成時期の特定には至らなかった。

※本研究内容は、静岡大学地球科学研究報告 第47号(2020年7月)pp. 15-21に掲載された同タイトルの論文に基づいています。

